

中古語におけるサラバ —「未然形+バ」条件節と比較して—

川村祐斗

サラバは「未然形+バ」条件節（以下：未然形+バ）の構造を持つが、未然形+バ衰退の流れとは切り離され、独自の変化を辿る（“別れの挨拶語”に変化する等）。この変化過程を把握するには、サラバが未然形+バの特徴である順接仮定条件をどのように表さなくなっていくのかという条件表現の観点での分析が必要である。そこで本発表では、歴史的变化を把握するための足がかりとして中古（源氏物語）を対象とし、サラバと未然形+バを比較した。

現代語の仮定条件文は「前件の時制」という観点から、A. 未実現事態（未来に生起する事柄）、B. 既実現事態（基準時に生起している or 過去に生起した事柄）、C. 非特定時事態（一回性の個別具体的事態を超えた一般的事柄）に分類できる。B. 既実現事態は「前件命題の真偽に関する話者の認識」という観点から、B1. 未知の事態（話者が前件命題の真偽を判断できない場合）、B2. 反事実的事態（話者が前件命題の偽であることを知っている場合）、B3. 既知の事態（話者が前件命題の真であることを知っている場合）に分類できる。

これに基づき中古のサラバと未然形+バを観察したところ、サラバには未然形+バとの共通点もあり（例：A. 未実現事態の帰結句は推量表現が多い）、順接仮定条件の一端を担っていたことがわかった。一方で、サラバには、①B2. 反事実的事態・B3. 既知の事態・C. 非特定時事態を前件とする例がない（未然形+バでは上記のすべての事態がある）、②修飾関係にある帰結句に推定表現メリ・ナリが出現する、③非言語的文脈を受けて発話される場合がある、④構成要素である指示詞サの指示対象が不明瞭で、前件の時制が特定できない場合がある等、未然形+バとの相違点も見られた。これらは順接仮定条件の範疇からは逸脱した接続表現としてのサラバの特徴と言えよう。

順接仮定条件を表さなくなっていくサラバの変化は、①～④のような特徴に起因すると考える。サラバの変化過程の詳細な把握には、このような順接仮定条件の範疇から逸脱した特徴に着目する必要があるだろう。